

アンデスにおける土地所有の変遷と社会変化

石 井 章

I 多人種社会としての特徴

ラテン・アメリカ諸国の社会構造を問題とする場合に、それが多人種によって構成されている複合社会^{(註1)(註2)}である点を度外視して考えるわけにはいかない。現在スペイン系アメリカ諸国の人種構成は、スペイン系を主とする白人、土着民インディオ、アフリカのニグロおよびそれらの間の種々の混血からなっている。その社会は、スペイン植民地時代のはじめからはっきりとした階層に分かれ、各階層はそれぞれ人種と結びついていた。最上位にスペイン生まれのスペイン人があり、そのつぎに新大陸生まれのスペイン人(クリオーヨ: criollos)があった。この二つの階層は相反する利害、感情を持ちながら、ともに大土地所有と結びつき、植民地の富を独占して上層を形成していた。第3の階層がメスティーソすなわち白人とインディオとの混血であり、第4の階層がインディオ、最下層がニグロであった。しかし近年は、このように人種ごとに明確に階層に分かれていた状態から、経済的な階級関係へ移行しつつあるといえる。

ラテン・アメリカの中でアンデス諸国を特徴づけるものを人種関係にみれば、それが中部アメリカ(Middle America: メキシコ主要部、グアテマラを含む)とともに征服以前インディオの高文化があった地で、現在もインディオおよびメスティーソが重要な人口構成部分を占めていることである。ギリン

(J. P. Gillin)はこの部分をメスティーソ・アメリカと名づけ、特にそのうちのメキシコ、グアテマラ、エクアドル、ペルー、ボリビアをインディオ諸国の名で呼んでいる。したがってこれらの諸国では、征服者であるスペイン人と土着のインディオとの関係が人種関係の中心をなすものである。

サーヴィス(E. R. Service)は、現在のラテン・アメリカにおける社会構造の型および経済発展の差異を説明する一要因として、征服当初のインディオ、ヨーロッパ人の関係を取りあげ、征服者による労働力のコントロールの仕方の差異がこれらの差を生みだすもととなったと説明している。かれは現在のラテン・アメリカを、(1)ヨーロッパ人が主な人口構成を占める地域=ユーロ・アメリカ(アルゼンチンの大部分、ウルグアイ、コスタリカ、ブラジル海岸の一部、メキシコ北部、アンティール諸島の大部分をこれに含む)、(2)メスティーソ・アメリカ(パラグアイ、ブラジル内陸部、アルゼンチン西部、チリ中部、ペルーの低地、中央アメリカ内陸部、ヴェネズエラ、コロンビアの一部を含む)、(3)インド・アメリカ(ボリビア、ペルー、メキシコ、グアテマラの高地)の三つに大分類し、これらは、おのおの征服時における土着文化の3種の形態と対応しているという。すなわちインド・アメリカに対応するのはブレ・コロンビアの高文化地帯で、人口稠密で大きな地域社会あるいは都市に住み、集約的な定住農耕に従事し、高度に組織化された神政国家によって経済は統制を受けていた。メスティーソ・アメ

リカに対応するのは低地の森林地帯で園耕（耨耕による集約的な土地利用）を行ない、人口は密でなく、村落は小さくかつ安定性を欠いていた。現在のユーロ・アメリカのうちウルグァイ、アルゼンチン、メキシコ北部の平原では、狩猟採集段階の部族が遊牧に近い生活を送っており、拡大家族以上の永続的な社会組織をもたなかった。土着民のこのような状態に応じて、ヨーロッパ人征服者によるその取り扱い方、労働力としての利用の仕方も異なってくるのが当然である。

ヨーロッパ人が原住民のコントロールについて最も成功を取めたのは、高地においてである。この地方の文化はスペイン本国の文化と根底において共通性が多い。両者とも大量の労働力を要する集約的な農耕に従事し、政治、宗教の両面で階層に組織化されていた。これに比して、スペイン文化と低地の園耕や辺境の狩猟採集民文化との共通性はずっと少ない。したがって他の条件を捨象すれば、征服者と被征服者との共通性が大きいほど両者の間の適合、調整は容易であり、それは被征服者にとって破壊的でない。その結果被征服者は、土着の文化形態や社会組織の、少なくとも地方的な基盤を失うことなく、今日に至るまで存続しえた。さらにかれは高地と低地の差を説明するものとして、高地の生産は一つの地域社会に多くの人口を支えるのに十分であったばかりでなく、スペイン人やインディオの非農業労働者を支えるだけの余力があったこと、人口稠密なこの地域では、スペイン人のもとから逃亡しても自給して暮らせるような土地を背後にもたなかったことなどをあげている。またスペイン人たちはこの土地に発達していた官僚国家の支配をくつがえしたが、下部組織はそのまま利用して住民を間接的にコントロールすることができた。これに対して低地において

は人口密度は低く、地域社会の規模も小さく国家組織は発達しておらず、かつ奥地へ逃亡してそこで自給して生存しえたために、原住民を労働力として利用しにくかった。辺境民となるとさらに移動性と自給性が高かったため、ここでは直接奴隷化する以外にインディオをコントロールする方法はなかった。ブラジル北東部の海岸やギアナ、アンティール諸島などにプランテーションが発達するのは、労働力としてニグロ奴隷の大量の輸入があつてはじめて可能であつた。

以上のような征服初期のインディオ、ヨーロッパ関係の相違がそれぞれの地域での文化変容の質に関係してくる。インド・アメリカでは、文化の接触は基本的には国家組織の段階で行なわれ、末端のインディオの個人や家族、地域社会に直接影響を与えることは少なかったため、文化変容の進み方は最もおそい。メスティーソ・アメリカにおいては、接触とコントロールはより直接的・人格的なものであり、急速な混血＝メスティーソ化が行なわれ、文化変容、同化が急速に進んだ。ユーロ・アメリカにおいては、インディオはほとんど絶滅に近い状態にあつたため文化変容は問題とされない。

インディオ諸国における現在の人種関係について、これらの諸国に共通にみられる特徴は、インディオ、メスティーソ、白人がおのおの別個の社会集団を形成して存在するという事実である。特にインディオは、その他の諸集団によって形成される国民社会 (national society) から離れた集団と考えられる。インディオの集団はほとんどが自給自足経済で、国民経済の循環と関係なく存在し、その社会は比較的同質性が強く階級分化は進んでいない。それ自身の政治・社会上のコントロールを有し、独自の宗教、儀礼の組織を有する。これ

に対してメスティーゾ集団は国民社会に参加し、その一部を形成する。メスティーゾの文化は都市の白人の文化に近づきつつあるか、あるいは白人の文化が、メスティーゾ文化の影響を受けつつある。いずれにせよ両者は互いに融合する傾向にある。

同じインディオ諸国の中でもメキシコ、グアテマラに比してアンデス諸国のほうが、インディオ、メスティーゾ、白人の各集団間の差異がはっきりしており、さらに地方に住むメスティーゾは、インディオの社会と同様メスティーゾ地域社会としてのまとまりを示し、独自の衣裳、その他の文化的特質によってはっきりしたグループとして認識されている。都市のメスティーゾに関しては区別はそれほどはっきりしてはいないが、ペルーにおいては国家の次元の政治、経済、社会のコントロールは、まったくヨーロッパ系を自認する少数上流の手に握られている。メキシコにおいてメスティーゾが国の政治、経済を支配しているのと著しい対照を示す。しかしながらここで注意すべきことは、インディオ、メスティーゾ、白人の差異といっても、現実にはそれらの区別は純粋に人種的なものではなく社会的・文化的 (Socio-cultural) なものであり、この間の障壁はまったく越すことができないという性質のものではない。

(注1) 複合社会 (plural society) とは、同一の政治単位にあって、隣り合って生活していながら、お互いに混じらず、融合しない2個以上の要素、または社会体制を含む社会である (J. S. Furnivall, *Netherland India*, Cambridge, 1939)。そして、それを構成する諸要素が集団として実体であり、それらの集団の文化は、他の集団の文化とは相互に一部借用、変容の過程がみられても連続してはいない。このような諸集団の関係から生まれている社会を複合社会という。

(注2) ラテン・アメリカにおける多人種社会が、上

の定義による複合社会にあてはまるかどうか問題が多い。ここでとりあげるスペイン系アメリカ諸国におけるインディオ、メスティーゾ、白人の関係にはさまざまな偏差があり、一括して複合社会であるかないかは規定しがたいが、複合社会的性格のものから別の性格の社会へ変わりつつあるようにみえる。すなわち、人種集団が消滅して階級分化が進みつつある。したがってこの種の社会を「多人種階級社会」(multiracial class society) と呼ぶ学者もある。

II 征服前の土地所有形態

スペイン征服以前のアンデス地帯における土着民の生活は、土地と密接に結びついていた。アンデスの地方社会に特徴的な生活共同体は、アイユ (Ayllu) と呼ばれる組織である。これは氏族集団、すなわち祖先を同じくする人々の集まりであると同時に、一定の領域を有する村に似た地縁的集団であり、また政治、宗教上の結合の1単位でもあった。その歴史はインカ以前の数世紀、すなわち狩猟、採集の段階から食料生産革命を経て定住農耕が始まったときにさかのぼる。アイユにおいては、集団労働と共有財産が経済活動の基礎をなすものであった。領域内の土地はもとより、そこに住んでいる動物も植物もすべてアイユに属した。

アイユの土地はヤタパチャ (llatapacha) とマルカパチャ (marcapacha) という二つの部分に分かれ、ヤタパチャは毎年各家族ごとにその成員数に応じて耕作のために割り当てられる土地と、公共の土地とからなっていた。公共の土地は、(1) 聖職者および宗教儀礼を維持するための土地、(2) 世俗の支配者や役人を維持するための土地、(3) 孤児、未亡人、社会的無能力者などを支える土地からなっていた。マルカパチャは森林、牧草地、および休耕地であった。アイユの成員の中からマユカ (村長) が選挙され、マユカの諮問機関として長老によ

て構成される長老会議があった。長い年月の間に近隣のアイユ同志が防衛上あるいは経済上の必要から結合してクラン（氏族）を形成する。クランが結合して1人の酋長（cacique）の統一のもとに部族が形成される。それがさらに部族連合を形成する。それらが戦闘を重ねた末13世紀にインカ帝国のもとに統一された。インカ帝国の支配は、自治組織としてのアイユを破壊することなく、高度に組織的なその統治機構の末端としてこれを利用した。インカ帝国は、その領土を3種類の土地に分類する。(1)アイユの土地、すなわち人民の生活に資する土地、(2)太陽（最高の神）の土地、宗教儀礼を行なうために利用される、(3)皇帝（インカ）の土地、宮廷および政府を維持し、戦争を行なう場合の財源として利用される。インカ帝国の末期には、このような形態の土地所有はコロンビア南部からチリの北辺にまで広がっていた。

Ⅲ 大土地所有の形成

スペインによる征服と植民地支配は、インディオの生活共同体に大きな変化をもたらした。征服の初期にスペイン人は黄金を求めて新大陸に渡ってきたことは事実であるが、それと同時に土地とインディオの労働力に対して、貪欲な態度を示した。農園を経営するのにも、豊富な地下資源を掘りだすにも労働力として大量のインディオを支配下におくことが必要であった。この目的のためにレパルティミエント（repartimiento：賦役）制度が採用され、これによって初期の入植者は思うがままにインディオを捉え、過酷な条件のもとに鉱山で働かせたり奴隷として取引したりできた。しかしこの征服者＝初期の植民者の利害は、本国の国王、官吏、教会の利害と対立するようになる。後者は征服者たちの無制限な土地とインディオの略奪を

おさえるため、インディオの土地に対する権利は尊重されるべきであり、インディオは人間として尊重され奴隷化されるべきでない」と主張した。

1503年に新大陸における土地と労働を規制するものとして、エンコミエンダ（encomienda）制度が採用された。これはスペイン語の *encomendar*（委託する）からでた言葉で、スペイン人がイスラム教徒を征服した際の経験に基づいて考えだされたものである。副王は特定の数のインディオをエンコメンデーロ（encomendero：エンコミエンダ所有者）に委託し、エンコメンデーロは労働力としてインディオを使う権利を有するとともに、かれらに対する福利、厚生など特定の義務を負った。この制度は征服の際功労のあった者に土地および地下資源を与え、未開人をキリスト教に改宗させるという副王の法王に対する約束を履行し、征服者を押えインディオを保護するという目的にあったものであった。しかしこのエンコミエンダの経営は副王の手にはなくエンコメンデーロによって行なわれたため、初期の目的と異なりインディオの保護、福利厚生やキリスト教化は行なわれず、インディオは奴隷の状態に陥った。エンコミエンダはインディオの土地をつぎつぎに蚕食し、征服後1世紀のうちにメキシコからペルーにかけてエンコミエンダの土地が、大部分を占めるまでになった。一方エンコミエンダのもとでの搾取を免れ土地を捨てて山間や荒地に逃亡したインディオは、そこでインディオ自由村（コムニダ・インディヘナ：comunidad indigena）を作った。これは征服前のアイユを引き継いだ共同体組織をもったものであった。初期のアイユが血縁的結びつきの強いものであったのに対して、後のものはいっそう地縁集団としての特徴が強くみられる。

エンコミエンダに対して教会の反対が強く、本

国政府の方針もこれに一致していくつかの法律が施行され、エンコミエンダはやがて違法とされる。しかしこれらのエンコミエンダが基礎となって、新大陸に個有の大土地所有アシエンダ(hacienda)が形成され今日に至るまで続いている。植民地時代の末期までには、土地は大部分アシエンダと教会の手中に帰し、コムニダ・インディヘナの住民を除くほとんどのインディオは、アシエンダでペオン(peon:半強制農業労働者)として働かされた。

IV ボリビアの土地改革と社会変化

ボリビアは1950年において、総人口の54%に相当する170万のインディオ人口を有した。これはラテン・アメリカの中でも最も高いインディオの人口比である。長い年月のうちに混血が進んでいるので、インディオと白人、あるいはメスティーソとの区別は、孤立したコムニダ・インディヘナや近年のヨーロッパ移民の多い大都市を除いて、純粋に人種的な区別というよりも社会的・文化的な差別である。またここでは白人という言葉を使うのは適当でなく、ボリビアにおける人種関係はメスティーソ対インディオの関係であるといったほうがよい。インディオのうち38%はアイマラ語のみを話す部族で、ボリビア西部の広い高原地帯アルティプラノ (altiplano) に住む。54%はケチュア語のみを話す部族で、かれらはティティカカ (Titicaca) 湖周辺の人口稠密な地帯を占める。この両者は互いに言葉が通じないばかりでなく、さらにその内部で方言の分化が著しく、共通の理解の妨げとなっている。インディオのうちスペイン語を話す者は6%と推定され、それらはラ・パス (La Paz)、コチャバンバ (Cochabamba)、ポトシ (Potosí)、スクレ (Sucre) などの都市の付近のメスティーソ地帯に限られている。人口の大部分は高地に住む。

東部の亜熱帯低地は国土の5分の3を占め、その多くが農牧に適する土地であるにもかかわらず人口稀薄であり、大部分が未利用である。北部のユングス (Yungas) 峡谷も同様人口は少ない。

1952年にはじまるボリビアの革命は、1910年以後のメキシコ革命に次ぎ、ラテン・アメリカでは2番めの社会革命であるといわれる。それがインディオ人口比の最も高い、最も遅れたこの国で起こった。この革命は政治的には革命側の勝利であったといえる。錫鉱山は国有化され、大土地所有はくつがえされて土地は農民に分配された。社会勢力としての大土地所有者は消滅した。しかしながらこの急激な改革は、錫の国際価格の低下、かんばつなどの影響と相まってこの国に経済的破局をもたらす結果となった。植民地時代、独立後の時代を通じて、ボリビアの経済は一方で世界市場に目を向ける部分があり、他方その生産物を地方市場にだすにすぎない大土地所有および伝統的な自給自足の経済が存在するという二重構造をもっていた。土地所有制度が農業労働者の生活を長い間変えず、社会はカーストに近い封鎖的な階層に分かれていた。この社会経済構造は、1932～35年にパラグアイを相手に戦ったチャコ戦争まで変わらず続いた。ボリビア側の敗戦に終わったこの戦争は、インディオに国民としての意識を目覚めさせ、インディオの隷属に基礎をもっていた経済関係、社会的均衡を打ち破る端緒となった。以後社会不安はつるの一方で1952年に至っている。

1940年パス・エステンソロ (Victor Paz Estenssoro) をかしらに、インテリを中心とする社会革命政党 M. N. R. (Movimiento Nacionalista Revolucionario) が組織された。M. N. R. は反帝国主義を掲げ、錫の国有化を唱えた。1952年に革命が成功して最初に手をつけられた改革は錫の国有化であっ

たが、革命政府の土地改革に対する考え方は穏健なものであり、有効に利用されていないアシエンダの土地を漸次土地を持たないインディオに分け与えるという趣旨のものであった。しかしインディオの農民カンペシノ (campesino) の側から完全な土地再分配の要求が起こってきた。カンペシノがこの国の国家的次元で決定的な力を持つようになったのは、この革命による変化の最も重要なものの一つである。革命に先立つ1936年、農業人口の密集しているコチャパン峡谷において、農民の協同組合シンジカート (Sindicato) が設立された。かれらは、アシエンダ所有者に対する封建的義務を免れること、生活をメスティーソの水準まで引き上げることを目指した。大土地所有者の側からは、当然これらを萌芽のうちに摘みとろうとする動きがあったが、これがかえってカンペシノの団結を強めかれらを政治に目覚めさせる結果となった。革命後カンペシノたちは各地で蜂起し、新政権はすみやかに土地改革を行なわざるをえない立場に追い込まれた。輸出産業としての錫を除くと、ボリビアはまったく農業によってたつ国である。土地改革の結果全農業が自給自足の小農経営になったことから、都市人口を養うだけの生産余力がなくなり、ボリビアは重大な食料危機に見舞われるという事態が起こった。

1953年に発せられた土地改革令は、二つの勢力の妥協の産物である。十分生産的かつ有効に利用されている土地は、その大きさに関係なくそのまま保存しようとする意見と、生産の効率に関係なくできるだけ多くの土地を多くのカンペシノに分配すべしという意見が対立し、前者が優勢であった。この法令の主たる内容はつぎのようなものである。土地、水利に関する最終的な権限は国家が有する。農地の私的所有を国家が認めかつ保証す

るのは、それが社会に対して有用な役割を果たす場合に限る。国が認める土地の私的所有の形態は、以下のものである。すなわち小作人の住居地、自作農とその家族により生計のため耕作される小農地、生産物の多くを市場に出す中程度の私有農場で賃労働を使用しあるいは機械を利用するもの、コムニダ・インディヘナ、共同農地、大規模経営農場である。この経営農場はアシエンダと区別され、単位農地当たりの資本投下量が大きく、市場向け生産に従事する農場で、そこで働く労働者は現金による支払いを受け、組合を組織し団体交渉権を有するものに限るとされている。さらに改革令によると私有地の広さには上限が定められていたが、それは場所によって異なり、おのおのの地方で一家族の生計を支えるのに必要な土地面積を規準として定められた。また同令により、コムニダ・インディヘナは、ひとたびかれらから奪われた土地を回復する権利を保証された。

しかしこの法令はメキシコのエヒード制度^(註3)にならった共同農場の考え方をとらなかった。これらの改革の結果得られたものは、農地は数多くの小私有地ミニフンディオ (minifundio) に寸断されるという状態で、とくに人口稠密地帯では最低生活水準以下のミニフンディオが支配的となるありさまであり、ボリビアの農業生産は低下した。これが現在のボリビア経済の困窮の一因となっている。

以上の革命、農地改革の結果、現在ボリビアのインディオの社会には急速な変化が起こりつつある。チャコ戦争までは、ボリビア国民といえスペイン語を話す都市や町の住民のことを指し、インディオの農民は除外されていた。閉塞的な社会成層構造が、植民地時代以後の長い期間にわたってインディオとメスティーソとの関係を固定した

ものとした。社会のカーブの固定化は、社会階層に人種的分類を一致させることによって強められていた。社会的移動の困難さ (social immobility) は農民に対する教育の欠如によりさらに強められたし、現在の運命を甘受するというカトリックの価値観も現状維持に役立った。このような社会体制のもとで、アンデス地方の農業は伝統的な方法により最低の生活水準をやっと保つものであり、危険を冒しても新しい技術を導入しようとする試みはなされなかった。

アンデスのインディオ社会はけっして全部が同質のものではなく、各地域社会によってさまざまな相違がある。パッチ (R. W. Patch) はコチャバンバ州の七つの地域社会を選んで、文化変化の過程を比較調査した。文化の一般的なインディオのタイプから一般的なメスティーソのタイプへの変化を測定する質問表を設定して調査を行なったところ、各地域社会は全体としてこのインディオ—メスティーソの類型の、どこかに位置づけられるが、地域社会に属する個人は同様の尺度によっては位置づけられないことがわかった。さらに各個人は、メスティーソの文化要素をつぎつぎに受け入れてほしいにインディオからメスティーソへと社会的地位が上昇してゆくのではなく、インディオ農民はインディオ、メスティーソ両方の文化要素を相互に交代しうる (alternative) ものと見ている。したがって地域社会内にも同一個人の中にも両方の文化要素が並存するのである。

ボリビアのインディオ農民にとっては、メスティーソの社会的地位を得るということは、それ自体では個人の目標として高い価値を持たない。ここでは文化変容は、地域社会が全体として漸次メスティーソの特徴をたくわえることによって行なわれるのであり、個人が独自にメスティーソの地

位を得ることではない。この点でボリビアのインディオの文化変化は、ペルーの場合と著しい対照を示す。ペルーの高地のカエホン・デ・ワイラス (Callejon de Huaylas) の地域社会での調査によるとそこでは個々のインディオがメスティーソの身分に高い価値を見だし、それを得ることを望むが、それは各人がインディオの地域社会を去り、メスティーソ社会にはいってメスティーソの文化要素を身につけ、インディオのそれを捨てることによって初めて可能なのである。このプロセスは正確には文化変容ではなく、地理的および社会的移動といったほうが適切であろう。

(注3) 1910年のメキシコ革命後の土地改革によってできた制度で、土地を集団で共有し、個々にその割り当て部分を耕作するものである。

V ペルーにおけるシエラと コスタの問題

ペルーはインカ帝国の昔から、スペイン支配体制下、独立後の時代を通じて階層化された社会が強固に維持されており、近年の技術的進歩、それに伴う社会変化にもかかわらず、依然社会的階層的秩序は変わりにくい。この点で社会革命を経験したメキシコやボリビアと異なり、ペルーの社会は過去と断絶がない。現在1000万近い人口のうち約3分の1がインディオとして社会的に識別され旧態依然たる生活を続けている。

ペルーの国土は、地理的環境および気候条件のまったく異なる三つの地域に分類することができる。すなわち西からコスタ (Costa: 海岸)、シエラ (Sierra: 山地)、モンターニャ (Montaña: 森林) の各地域である。現在のペルーにおいて最も重要な地位を占めるのがコスタである。この地域に国の政治、経済の中心があり、首都リマを含めて都市人

口の大部分がここに集中している。太平洋が外界との交通上の役割を占め、アンデス山地に発する河川が砂漠地帯に扇状の谷を形成し、肥沃な農地を提供する。コスタは全体で国土の10%を占めるが、そのうち耕作されているのは5%のみである。昔の高文明の舞台であったアンデス山地は国土の40%を占めるが、そのうち可耕地は山間の盆地や峡谷の2000メートルの高さにあり、山岳が相互の交通の障害となっている。第3の地域モンターニャは国土の50%を占め、アンデスの東麓とアマゾン上流の平地を含む。ここは自然資源の点では恵まれているが、交通の不便と人口の少ないことが発展の障害となっている。

ペルーの社会はいくつかの社会集団からなる複合社会の典型といえるが、そのうち最も顕著なものは、メスティーソとインディオの社会集団である。総人口の25%を占めるコスタの住民はほとんどメスティーソからなる。商品作物の生産を行ない、また近年工業化へ急速に進みつつある。動的な価値観と、流動性のある社会の構造を有する。シエラの住民は多くはインディオであり、下層のメスティーソも含まれる。伝統的な技術による自給農業を行ない、移動性の少ない社会構造を有する。

インディオとメスティーソの社会的・文化的差異^(註4)は、植民地時代に形成されて現在まで続いているもので、これがコスタとシエラの社会・経済の発展の差と相まって、国民的統一を求めるペルーにとって主たる障害をなしている。

概してメスティーソはシエラおよびコスタの都市や町に住むのに対して、インディオはシエラのアシエンダやコムニダ・インディヘナに集中しており、メスティーソの社会と離れて存在する。総数約300万のインディオのうち約100万がアシエン

ダにおけるペオンとして、100万がコムニダ・インディヘナの小独立自営農民として、100万が土地を離れ、鉱山やメスティーソ村落の労働者として、あるいは季節労働者として生活する。階層の最上位を占めるものとして、コスタにごく少数の白人エリートがいる。

海岸の広大なアシエンダを近代化することは比較的容易であって、これによって生活水準は上昇し教育は普及し、この地域の住民は近代産業社会の価値観を同化しつつある。工業化による変化の顕著なものとして、政治権力は土地貴族の手から大農園の商品生産者、新しい企業家階級の手に移り、社会はより移動性の高いものとなったことがあげられる。今までのところこれらの変化は、コスタの大規模な商品生産のためのアシエンダおよび都市に限定されている。コスタはペルーにおける上層地区をなしており、社会的地位の上昇を得るためにはシエラからコスタへ移動することが唯一の道といえる。シエラにおける人口圧力と、コスタのより高い生活の魅力とが、人々をシエラからコスタへ引き寄せる二重の要因である。しかしながらコスタは毎年加速度的にふえるシエラからの多量の人口流入を吸収するだけの潜在的経済力を欠いている。

ペルーが国家としてバランスのとれた総合的發展を遂げるためには、シエラ、モンターニャなどにいっそうの関心が払われなければならない。広大なモンターニャ地域の開発に必要なだけの人間と資本が投下されることは近い将来には期待できない。これに対してシエラは、資本不足と過剰人口に悩んでいるのであるが、単純に人間をシエラからコスタへ移住させることだけで問題は解決されない。最近政府は民間投資を刺激することによってシエラに新しい雇用を増加させることにつと

めている。シエラにおけるインディオおよびメスティーソの自給農耕民が、商品生産の農業および工業の新しい生活の仕方に適応できるか否かに問題の解決はかかっている。

ペルーにおいて「インディオ問題」の名で呼ばれている社会問題は、その名から察せられるような人種問題ではなくて、インディオおよびメスティーソを含んで発展の遅れたシエラと進んだコストアの格差の問題であるといえる。シエラは歴史上の各時代を通じて現在にいたるまでペルーの背骨をなしてきた。ペルーの主たる自然資源、人的資源の大半はこの地域にある。ところがシエラが国全体に貢献する程度に比して受益が少ないといえる。シエラの富と労働力は続々とコストアへ流出してしまう。モンターニャの開発ということは、人と資本が不足して近い将来に考えられないため、シエラの開発、特にインディオに対する働きかけが強く要求されるゆえんである。シエラでも道路交通の発達などいくつかの変化があり、コストアとの間に交易も行なわれるようになったが、そうした変化はまだ技術的な面に限られ、それに伴う社会変化は微弱である。シエラにおけるメスティーソの社会集団においては、青年層が続々コストアへでしてしまうので、周囲のインディオ村落に生活上依存せざるをえなくなってきた。インディオにとってもシエラからコストアへの移動は可能となった。賃労働者あるいは兵士としてコストアにでたインディオは、そこでスペイン語を覚え、より高い生活水準と、シエラの村落の固定した習慣や規制からの自由を楽しみ、新しい価値観と態度を身につける。かれはシエラの母村に帰るともはやその価値観に合わず矛盾を感じるが、しかしメスティーソ社会からも受け入れられない。その結果個々のインディオはナショナルな社会・文化に同化

されていくが、シエラのインディオ・コミュニティでは旧態依然たる状態が続くこととなる。これは、伝統的な社会構造に直接改革がなされないかぎり変わらないであろう。ところが社会構造の改革にとって最大の障害となるのがシエラにおける大土地所有（アシェンダ）の存在である^(注5)。非アシェンダ村落すなわちコムニダ・インディオヘナにおいては社会組織、価値観の変化はより大きい。

(注4) ここでもラテン・アメリカの他のインディオ諸国と同様400年以上にわたって人種の混じりが行なわれたため、両者の差異はもはや人種の特徴によるものではない。言語、衣袋、態度が両者を分ける際の重要な基準となる。上着の言語を語り、手製の衣裳を身につけ、コカを吸うことによってインディオとして識別され、同一人がスペイン語を話し、洋服を着、コカを吸うことをやめればメスティーソとして識別される。

(注5) アシェンダのインディオの一社会を、近代的な生活様式に参加させる試みがなされた。ペルー政府の援助のもとに1952年よりペルーのインディオ協会 (Instituto Indigena) とアメリカのコーネル (Cornell) 大学の共同で、アンデス山中のカエホン・デ・ワイラス (Callejón de Huaylas) 峡谷にある Vicos という村落に対して行なわれた Cornell-Vicos Project がそれである。この Project は Vicos の指導権を1人のパトロンの手から共同体の手へ移すことによって、400年来ほとんど変化を受けていないこの社会構造の改革に成功を取めている。

VI おわりに

本文は昭和39年度の研究課題「アンデスにおける土地所有の変遷と社会変化」の報告としてまとめたものである。最初の目標では、アンデス地域全般にわたって土地所有形態の変遷を征服から現在にいたるまで歴史的に概観し、そのうえで土地所有の変化に伴って現在起りつつある社会変化を特定の事例に基づいて研究してみようと思っていたが、文献上の制約、時間的制約などからできたものはかなり異なったものとなってしまった。

まず近年の社会変化にかんしては、アンデスの中でもボリビアとペルーの2国をとりあげ、ボリビアについては近年の最大の事件である土地改革と、それに伴って起こりつつある社会変化を、ペルーについては直接土地所有の変化ではないが、シエラとコスタの地域較差の問題、それと関連してメスティーソとインディオの社会集団間の問題をとりあげた。これらの2項が中心をなしており、その前の征服前の土地所有形態、大土地所有の形成の2項はきわめて簡単な記述にとどまらざるをえなかった。さらにボリビアやペルーにおける土地問題や社会変化を考察する場合に常に考慮に入れざるをえなかった人種や社会集団の問題を、ラテン・アメリカ全体の背景で展望する1項をはじめに設けた。以上のような趣旨であるが、本文は全体として何らかの問題に解答を与えるという意図をもったものではなく、この地域にかんする問題の所在を提起したにとどまる。

《参考文献》

1. 青柳清孝, 「複合社会」, 『現代文化人類学3, 人間の社会I』, 中山書店, 1960。
2. Beals, R. L., "Indian-Mestizo-White Relations in Spanish America", in A. W. Lind ed., *Race Relations in World Perspective*, University of Hawaii Press, 1957.
3. Gillin, J. P., "Mestizo America", in R. Linton ed., *Most of the World—the People of Africa, Latin America, and the East today*, New York, Columbia University Press, 1957.
4. Herring, H., *A History of Latin America—from the beginnings to the present*, New York, Alfred A. Knopf, 1961.
5. Holmberg, A. R., "The Changing Community Attitudes and Values in Peru: a Case Study in Guided Change", in R. N. Adams and others, *Social Change in Latin America Today—its Implication for United States Policy*, New York, Harper & Brothers, 1960.
6. 泉 靖一, 『インカ帝国』, 岩波新書, 1959。
7. レオナード (O. E. Leonard), 沼田頼雄訳, 「ボリビア——土地・住民・制度——」, 農林水産業生産性向上会議, 1963。
8. Mac-Lean y Estenós, Roberto, *Sociología del Perú*, México, Instituto de Investigaciones Sociales, Universidad Nacional Autónoma de México, D. F., 1959.
9. 三浦信行, 「南ペルー・アンデスの村落・政治・宗教組織」, 『民族学研究』 Vol. 27, No. 4, 1963年11月。
10. Organización de Los Estados Americanos., *Integración Económica y Social del Perú Central*, Apéndice II, Washington, Unión Panamericana, D. C., 1961.
11. Patch, R. W., "Social Change in Bolivia and U. S. Policy", in R. N. Adams and others, *Social Change in Latin America Today*.
12. Service, E. R., "Indian-European Relations in Colonial Latin America", *American Anthropologist*, Vol. 57, No. 3, 1955.

(調査研究部ラテン・アメリカ調査室)